

邦譯 アルタン・トプチ(蒙古年代記)について

——外務省調査部第三課發行——

石 濱 純 太 郎

頻りと東洋學の文獻を世に貽りつゝある外務省調査部は有名なる蒙古歴史アルタン・トプチを今回出刊した。原文に小林高四郎氏の譯註を加へて、一には蒙古人に文化資料を供給し、二つには此種文獻の極めて乏しい我國學界に研究資料を提供する目的を達せんとせられたので、我等の喜び之に過ぐるものはないのである。殊に之が校訂譯註に當られたる小林氏は人も知る我が蒙古學界の俊秀で、幾多の論撰に於て其蘊蓄を發揮し、博聞多識の才學は此任に最も適したる學者である。斯の人にして此のロシア以外に翻譯せられざる名のみ高いアルタン・トプチの和譯に従事せられたんだから、我等は喜ばざるを得ないのだ。

評者も嘗てはアルタン・トプチ研究に多大の關心を抱いた事もあつたが、何分にも原文を見得る機會に恵

まれなかつたので、何等の成績はない。大正六年に本書の提要を蒙古藝文雜錄中(東亞研究第七卷第一號)に記したが、固り本書全部を知つてゐたのでなく、僅にブレットシュナイデルやラウフェルに依據したに過ぎなかつた。鷺淵先生が成吉思汗の挽歌を譯註された時に、その書誌的小註を支那學誌上(第四卷第壹號)に摘記したが、實際に蒙文書社の成吉思汗傳にアルタン・トプチを含有せる事を指摘はして置いた。其後蒙文書社刊本にも二種あるを知つたが、比較研究するの暇を持たずに終つた。それだから、山本守學士が東洋史研究誌上に之を譯載しかけた時に此點に言及しないのを遺憾に思つた事があつた。蒙古年鑑には小林氏が解題を書かれて、故出村良一氏の翻譯が未成に終つた事を知つた。蒙古大觀は座右に持たないので讀んでゐない。

小林氏は蓋し出村氏の遺業を繼がれた事となる。以上の如く多少の關心は有り乍ら何等の研究迄に至らなかつたのは、一に懶惰の性質にもよるが、實はゴムボエフの譯註を見得ない事が累を爲してゐる。それにも拘らず本誌編輯者は課するに紹介批評の任を責めて、案稿は頗る急である。本書に多少の因縁ある評者は辭するを得ずして一二の評言を記すも已むを得ない。

先づ本書の原文校訂である。小林氏は北京版を若干の明白なる誤刷を匡して印刷され、ゴムボエフ版との異同を脚註に示されたとある。上述の如く評者にはゴムボエフ版が無く、又北京版も小林氏が利用せられたらしい再刊本を早速に参照し得ないのであるが、之を初刊本と比較すると、北京刊も初刊本を底本とせられた方が良かったらしい。初刊本の方がゴムボエフ本に近いので、再刊本は誤脱もあり、改變もあるからである。例へば、卷首の「唵吉祥成就」も、五四頁一行の「次の兎の年に」(これは次の歳兎の年となつてゐる)も、同六行「その後アタイ」も、五五頁「わが栗毛の駒の鼻端を知れ! わが」も、皆初刊本は露本と同様存在してゐるのだ。小林氏は校訂にボズドネエフ

の蒙古文學講本所収を一も採用されてゐない様だが、これは所謂斷簡かも知れないが、露本を校訂して收めたのだから、少分ではあつても採用するのが當然である。少分とは云へ成吉思汗の所は全部あるのである。さうすれば六頁註七四などはいなくなる。

翻譯については評者詳しく云ひ得るものではないが、二頁三行捨帝の次は捨固尼とし、註一九にデプテルゴンポを引きムチリンダ王が間にあると記してゐるが、これは原文に明かに捨帝の次に「その子捨持王」とあるから誤脱である。三頁末行に西藏最初の王を西藏名で出してゐるが、後文と同じく蒙古名にすべきだらう。四頁初は「その子尊き七人の椅子を有する王」と直譯すべきで、別到他書に牽引せられる要はない。それは註で釋すべきであらう。三六頁末行の上には原文約三行の誤脱がある。これはこの挽歌にとつては重要な記事である。一〇一頁の尾より二行目には長い衍文がある。これ等は翻譯の誤謬でなく、恐らく印刷の誤であらう。

脚註に關しては評者は餘り研究してゐないが、一頁註二の「*skt. Mahā Samati* に改む」はおかしい。此

邊の諸王名の梵藏名には翻譯名義大集をも参照せよ。蒙古字で書かれた梵語を直ちに梵語と云はない方が分り易い。二頁註三二の Andi は Nandi と讀むべし。三頁註四四の keik は原文 keis とあり、初版本は keis である。七頁註八一のゴ譯文中に「ナルワス・ウンスに」の語を脱する如し。一〇二頁註一〇七三は随分とおかし。

誤植は随分澤山ある。一々註しない。五頁四行目からが露本になき事はボズドネエフ本にても分るから、五行目初の『は誤り、又六頁六行目の』も第四十二代の次に移す事。一〇二頁十三行初の『はとる。一〇三頁四行目の Lindan は原文通り Legdan とする。六頁註七二参照。

解題に作者は不明とあるが、メルゲン・ゲゲンだと云ふ例がある。メルゲン・ゲゲンは誰だか知らんが、ルドネフのポロル・トリ解題に出てゐたから、評者は東亞研究第七卷第參號三九頁に之を掲げて、異聞を弘めて研究を期待して置いた。同誌第七卷第四號にはルドネフの解題を抄録してある。

評者は本書全部を精讀もしないで妄言を吐いた。切

に譯註者の寛恕を祈る次第だが、この和譯を得て我學界は愈々本書研究の内容に立入るを得たわけだから、本書出刊の功績は偉とすべきである。況んやこれが全譯はゴムボエフ以後小百年にして我國が初めて試みたのは誇つていゝと思ふ。〔石濱純太郎〕